



アジア最大規模の韓国でのホテルアートフェアに本学美術学科が特別出展

8月25日(木)～28日(日)の4日間にわたり、韓国・ソウル市内のホテル「JW マリオットソウル」にて行われた、アジアでも最大規模のホテルアートフェア「AHAF(Asia Hotel Art Fair)SEOUL 2016」。今回、海外の大学として初めて本学美術学科が招聘され、学生や卒業生、教員ら総勢9名が出展。海外のフェアで作品を発信するという貴重な経験に恵まれました。



ASIA HOTEL ART FAIR **SEOUL 2016**

今回で15回目を迎え、アジアを中心に世界各地から作品と買い手が集まる「AHAF ソウル」。そんな人気と実績を誇るアートフェアから本学美術学科が特別招聘を受けるきっかけとなったのが、今年7月にホテルグランヴィア大阪で開催された「アート大阪 2016」でした。同フェアで本学美術学科の出展作品を目にした AHAF ゼネラルマネージャーのソ・ムンジンさんから、日本の若手アーティストとしてぜひ出展してほしいと依頼があったのです。

同学科で選抜された9名のメンバーは、全員がこれまでの作品ではなく新作を出展するという取り組みに挑戦。短期



間で高いハードルを乗り越え、それぞれの自信作を携えて韓国へ向かいました。会場の「JW マリオットソウル」では、2つの客室が本学の展示スペースに。ベッドやバスルームも含めた生活空間に近い空間をいかして、自ら設営・展示を行いました。開催中は多くの来場者が訪れ、韓国のコレクターらと直接会話をする機会も。海外のアートマーケットの現場にふれ、様々な体験を積んだメンバーたち。ここで得た自信や刺激は、これからの作家活動においても大きな力となることでしょう。

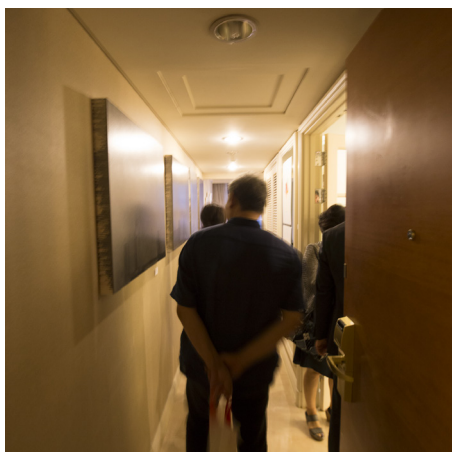


主催者コメント

若手作家の発掘に力を入れている「AHAF」では、これまでコンペで選んだ若手作家の作品を多数紹介してきました。去年は初めて韓国の美術大学の学生作品による企画展を実施。そして今年は、海外の大学として初参加となる大阪芸術大学の皆さんの作品を紹介することができ、非常にうれしく思います。韓国の若手作家はどちらかというとテクニク主体、日本の場合は色使いを大切にした抽象的な作品が多いように感じますが、大阪芸大の作品群にはとりわけその特徴が強く、独特な色や表現が印象深いですね。私自身も好きな作品がありますし、韓国でも関心を集めるのではないのでしょうか。このたびの招聘にあたり、展示ではなく販売を目的とするアートフェアに参加することが大学側や学生の皆さんにどう受けとめられるのか少し懸念もありましたが、とても前向きかつ積極的に対応していただけて感謝しています。今回出展していただいたことが、韓国と日本を結ぶ一つの架け橋になればと願っています。また今回の「AHAF」は、従来よりも期間を延長して一般の来場者にも開放し、隣接の百貨店とのコラボレートプロモーションも展開するなど、よりいっそう幅広く楽しんでもらえる場になりました。そんな開かれたフェアへの参加が、皆さんのさらなる前進につながればと期待しています。



AHAF ゼネラルマネージャー
ソ・ムンジンさん



会場となった「JW マリオットソウル」は、人気の新興高級住宅街に位置する特級ホテル。フェア初日は招待されたVIP顧客が、続く3日間是一般観覧客が続々と来場しました。客室内に展示された学生たちの作品に見入り、中には技法やテーマ等について質問する人も。韓国のアートファンがどう作品を見てくれるのか、実際に生の声を聞いたことも大いに刺激になりました。

AHAF 出展者



馬場雄基

人間の根源的な生きる力をテーマに、表現方法はその時々で変化させつつも、「黒」にこだわった作品を描いています。今回、海外のフェアに出展して現地のリアルな空気を感じることができたのは、とても大きな経験となりました。韓国やアメリカの方に作品を購入していただいたほか、台湾のギャラリーオーナーからも声をかけていただき、一貫した思いを持って日々制作に取り組んでいれば、国を超えて必ず伝わると実感。海外のお客さんにも認めてもらえたことで、これから作家として生きていく自信につながりました。



綾理恵

空気や水といった森の循環がテーマ。100号など大作を描く時と同じ思いを、小さなサイズで表現するのは楽しい挑戦でした。ホテルという日常により近い空間に作品を配置してみて気づかされることも多く、私はバスルームで展示しましたが、大理石の壁や鏡などの背景によって独特の効果も加わったと思います。韓国のお客様は第一印象の強い作品に興味をもつ傾向が高く、自分たちの作品のイメージを見直すきっかけに。作品が売れた嬉しさを味わった反面、販売時の梱包ミスなどから教訓も得て、とても勉強になりました。



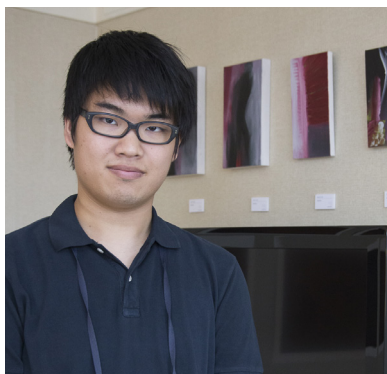
矢野茜

副手として今回の出展のための手続きに駆け回りながら、これまでひそかに温めていた新しい表現で、大小70点余の作品を描きあげました。空港で重量オーバーの荷物をあわてて詰め直すなどトラブルもあったものの、皆で力を合わせて乗り切れたのが心に残っています。滞在中も全員で楽しむ時と個々に考える時でメリハリをつけ、有意義に過ごせました。初めて作品を購入していただき、このドキドキした気持ちはお金では買えないと実感。また作品をTシャツにして商品化したいというオファーを受けたのも嬉しかったです。



山下三佳

作品のモチーフは故郷の富山に広がる田園風景です。大地からわき出る生気を描き、色と色とがぶつかるエネルギーも感じてもらいたいと思いながら、制作に取り組みました。現地ではホテルという空間での展示に苦労しましたが、自分の作品に興味を持って下さった方との交流も楽しく、5泊6日の滞在は長いようで短く感じられました。タブローとドローイングをセットで購入して下さった初めてのお客様から、後日メールで、ご自分のオフィスに飾ってくださっていると聞き、作家としての喜びをあらためてかみしています。



鈴木雄介

ホテルロビーには大きな作品が展示され、入った瞬間からアートフェアらしい雰囲気を感じられました。他ブースにも面白い作品が多く、言葉や文化は違ってもアートは通用すると思いました。自分の作品では、洞窟のような暗がりから見える風景や、海に潜った時のイメージを表現。短期間でパネルから作り直すのに骨を折りましたが、作品を購入してもらえた時は、「やった！外国の方にも通じた」と喜びもひとしおでした。またメンバーに助けをもらい、互いに協力し合う中で、多くの人にサポートしてもらう有難みも感じました。



岡田堯之

生まれ育った奈良で感じていた大地のエネルギーを変えらぬモチーフとしながら、「アート大阪」出展作など既存の作品は出さず、素材も変えて、よりレベルアップしたものを追求。動きながらの制作は大変でしたが、壁を突破できた手応えがありました。滞在中はどうしたら作品を良く見せられるか悩み続けましたが、タブローの中で最も自信のあった2点が実際に売れた時は驚きました。「AHAF」では若いお客様が多く、年齢を超えた芸術への関心の高さを感じました。色彩や素材、空間など日本と韓国との違いも興味深かったです。



大塚孝太郎

以前からカメラアイを意識して写真をベースにした作品に取り組んでおり、現在はシルバーを使った技法で描いています。初めてアートフェア出展というチャンスを獲得して制作意欲も高まり、大きなタブローのみに絞って挑みました。今回の経験を通して最も成長できたと思うのは、作品に対する責任感が深まったこと。一方で、来場者ももっとコミュニケーションをとれるよう工夫すればよかったと反省点も感じています。鑑賞者の視線を意識するようになったり、グループ活動能力が身についたり、様々な学びも得られました。



森山枝美

「アート大阪」に続いて「AHAF」に出展できることになり、よりいっそう強い気持ちでのぞみました。今回はキャンパスでの平面表現から離脱。紙粘土や蜜ろうで作った羊のオブジェに針金や木を組み合わせた立体作品で、自分の世界観を表現しています。初めての海外経験は驚きや発見の連続で、韓国語はともかく海外に出るには英語力が不可欠だと痛感。自分の作品を厳しく客観視する目も養われました。今後はプロとしての意識をしっかり持ち、自信を持って堂々と作品を発表していけるよう、さらに努力したいと思います。



中川知美

教員として学生を引率しながらメンバーの一人として出展しました。「AHAF」参加が決まってから、作品制作に対する学生の意識が非常に高まり、発表の場として世界を視野に入れるように。私自身もその熱意に刺激されて制作に取り組みました。フェアでは大半がギャラリー出展である中、大学として特別参加しているニュース性、また他ブースとは違う「空間」を意識した異色な展示で、本学は大いに話題となっていました。学生にとっても大きな学びとなり、世界に通じるこうした場を今後も積極的に開拓すべきだと感じました。